

# だいじなこと

島根県浜田市立第一中学校 3年 濱角 みひろ



大津市で起こったいじめ自殺事件から10年たったということで、昨年この事件についてよくニュースで耳にしました。動機は「ゲーム感覚」というのを聞いたとき、そんな軽い気持ちで他人を死においやろうとする加害者を、絶対に許すことはできないと思いました。

「中学生が死亡、いじめによる自殺か」といったニュースを見ると私は「なぜ人間は優劣をつけたり、無駄な争いをしたりして、自分と同じ種族の人間を傷つけるのだろうか」と疑問に思ってしまう。

こういった事件が起こったとき、日本がよく行っているのが、いじめられた子どもをカウンセリングして心を癒やしたり、自殺願望をなくしたりするものだそうです。ですが、一部の国では、いじめられた子どもよりもいじめた子どもをカウンセリングする国があります。それを知ったのは、ドラマの中での主人公の「欧米の一部ではいじめてる方を病んでると判断するそうです。いじめなきやいられないほど病んでる。だから隔離してカウンセリングを受けさせて癒やすべきと考える」という言葉でした。

私はこれを知ったとき、いじめられた子どもが可哀想では？と思いました。ですが、段々と日本のやり方は間違っていると考えようになりました。なぜなら、日本の方法では何も進展しないと思ったからです。いじめをしている子どもという加害者が存在する限り、いじめられる子どもという被害者は、確実に存在するからです。

つまり、いじめの根元であるいじめをしている子どもがカウンセリングによって更生することができたら、加害者が消え、おのずと害を加えられる被害者もいなくなります。そうすれば、いじめというものはなくなるのではないのでしょうか。簡単にはなくならないかもしれませんが、被害を受ける子どもが減少するはずです。

いじめとは話が変わるのですが、とても快適な刑務所が世界にはあるそうです。ノルウェーにあるハルデン刑務所はとても快適で社会復帰がしやすい環境とされています。でもそれなら、またここに戻ってこようと再犯率が上がってしまうのではと思うのですが、ノルウェーの再犯率は世界最低レベルの16パーセントとなっています。日本の再犯率は4割くらいというのですから、いかに低いかわかります。

なぜなのか、自分ならと想像してみると、例えば独房に入れられると早く逃げ出したいと感じるし、看守に大きな声で怒鳴られたり命令されたりすると、

負けたような気分になって腹が立ちます。何より、自由に行動できず、早くここから出たいという気分になると思います。ハルデン刑務所では、受刑者は、話をしたり、ご飯を食べたりゲームをしたり自由に行動できるのだそうです。看守はできるだけ受刑者に寄り添う立場で接します。そのかわりに決められた時間、場所にいななければならないそうです。このように犯罪をしてしまった人を独房に入れて罪を償わせるのではなく、ホテル並みに環境のよい刑務所で「次」がないようにするということが進められています。

ここで共通してくるのが、いじめっ子へのカウンセリングの考え方です。ノルウェーではただ罪を償わせるのではなく、社会復帰しやすいようになっています。いじめに置き換えると、いじめをした子どもがただ反省するだけではなく、次はないようにカウンセリングを受けるということになります。

私も初めは、いじめられた子どもをカウンセリングするのが良いと思っていました。大きな怪我をしたら、その怪我が治っても傷跡が残るように、いじめられた子どもは何年、何十年と心に大きな傷を抱えたままになるからです。実際、私の友人は小学校低学年に受けたいじめの事を中学3年生になってもまだ覚えているそうです。将来の被害者を減らすためにも、いじめをする子どものカウンセリングが第一ですが、いじめを受けた子どものカウンセリングも必要です。ですが、だいたいなことは標的が変わって同じことが繰り返されないこと、被害者の数が少しでも減ることだと思うのです。そのためにも、意識の変革が必要ではないかと思うのです。いじめられる子どもの数の減少、いじめた子どもこのからの生き方など、未来を見据え、変えていくことが「だいたいなこと」なのではないでしょうか。